

呪術に於ける合理性の意識

宇野 圓空

古來呪術は神秘的の行法として、神怪な事象は直ちに呪術的と云はれて居るが、しかも他の一方に於てそれは又秘密の科學とか原始的科學と云はれて、科學的自然的のものとは見られ、少くとも宗教などに比しては一層科學に近いものと考へられて居るやうである。それで若し呪術が純粹な科學でもなく、又嚴密には宗教と區別されるべきものとすれば、それは此兩者に對して果して如何なる關係を有するのであらうか。其發生的歴史に於ける相互の關係や、又其儀禮、行事の形式等に關する異同は且らく措いて、其根本、觀念又は意識内容から之を見た時に、呪術は科學的な技術に於ける如き因果の觀念や合理性の意識を持つて居るか、それとも又宗教と同じく神秘的超自然的と云ふやうな意識を根柢とするのであらうか。換言すれば或る目的を達成せんが爲めの方法若くは技術としての呪術は、其手段と目的との間に科學的な因果關係を認めて居るか、或は其關係を神秘不思議のものとして全然因果の觀念を超

越して居るのであらうか。此問題の解決は呪術が普通に科學と宗教との連鎖、或は少くとも兩者の中間に位するものと認められて居るだけに、亦宗教に於ける因果觀念が如何なるものであるか、又それが科學の論理と如何なる關係を有するかを説明する基礎となるのである。

リバーは人間の實行的態度として見た科學と呪術と宗教との關係をば、海上に於ける一船員の例をかりて説明して居る。即ち或る般員が船の進行は蒸氣力により、蒸氣は熱、石炭によつて生ずるといふ理論的確信の下に、氣罐に石炭を投げ入れる態度は科學的であるが、同じ船員が他の船員と賭博を試みるに當つて、一度其席を離れて運勢を好くしやうとするが如きは呪術的態度である。而して若し彼が暴風に遭つた時、神の信仰から躡いて之に祈るならば、それは即ち彼の宗教的態度であつて、要するに人間の科學的、呪術的及び宗教的態度は、之を機械的、強制的及び人間感情的態度として見ることが出来るといふのである (Psychological Study of Religion, pp. 45)。これによると呪術は或る事象の間に神秘的な關係を認めて、其一つを手段として實行することに依つて、他の結果を強制的に實現せんとする人間の實際生活の一形式である。而してそれは或る超自然的な人格を認めて之れと人間的に交渉し、其力によつ

て自己の目的を達せんとする宗教とは其心的態度を異にし、又原因結果の間に合理的關係を認め、其原因から論理的必然的に其結果を導かんとする科學、即ち科學的技術とは全然其性質を異にするのである。

かく呪術の本質は超自然的な事象の利用又は神秘的勢力の強制であつて、それは自然的な因果によつて合理的な力を利用する科學とは根本的に異り、むしろ超自然的勢力に依頼する宗教に近いといふのは從來最も普通に行はれて、居る考へである。即ちユベル及びモースは呪術と宗教との間には兩者を分離する反對的原理はなく、兩者は共に同一の神秘的勢力を基礎として居るとし (*Mélanges d'histoire des religions*, pref. XXIV) デルケイムによると呪術は宗教的神秘的原理が神聖な宗教的事物以外に適用されたものに外ならぬ (*Elementary Forms of the Religious Life*, pp. 360-362)。然らば呪術は宗教と共に全然科學と相容れないものであらうか。詳言すれば呪術の手段と目的との間には何等の連絡もなく、兩者の關係は全く不思議、不可解であつて、呪術は科學の如き合理的必然的な因果關係を利用する技術とは異り、全く理論的に説明の出来ない不合理な結果を望む迷信的行爲であらうか。

此點に就ては如何に呪術を神秘的のものと見做す人と雖も、其手段と目的との間

に多少の因果關係又は法則が認められて居ることを拒まない。リュートバは多くの呪術の形式が單なる意志表示としての行爲、偶然的の威赫や危険を避ける爲めの報償としての行爲、及び自發的の有機的反應に淵源することを認めると同時に、又其多くが特に或る目的の爲めに思慮を経て計畫された手段としての行爲であつて、此場合にそれは所謂『類似は類似を生ず』(like produces like)等の論理的基礎の上に成立することを主張して居る (op. cit. p. 169)。又トローイによると原始人は其原因が明かでない危険や害惡の原因として精靈、神、神秘的勢力等の働きを想定し、又觀察によつて漸次に之れに對應すべき方法を發見するが、これが即ち超自然的事實の學となるのであつて、呪術行事の基礎は茲に存する。即ち呪術は觀察に基く連續現象の學であつて、人間の心情は其反省が發達して自然法の知識を獲る以前から、既に凡ての連續現象をば原因結果の關係を表はすものとして認めんとして居るのである (Introduction to the History of Religions, pp. 393, 398)。即ち多くの呪術の根柢には多少の因果關係の觀念があり此に基いて或る原因を再現することに依つて、其結果を實現せんとする方法が即ち呪術的行爲だと云ふのである。

尤も呪術の起源に就ては之を合理的な目的を有する意志的行爲と見ずして、むしろ

る目的の意識なき自發的行爲とする人も少くない。例へばキングによると呪術の起源は最初から或る原理の上に立ち、或る目的を以て計畫されたのではなく、むしろそれは人間が其境遇に對する自發的反應としての行爲、特に感情的緊張に伴ふ行爲であつて、それが何等かの効果を有するといふ目的論的意義は後に至つて附加へられた觀念である。例へば中央アウストリア人が或る人を殺さん爲めに、其人を狙つて棒を突き出すのは、現實に其人を殺し得ない時に、其強い感情が惹起した發作的行爲である。又彼等が婦人を獲んが爲めに禁呪ひの鉢卷をするのは、本來は唯婦人に對する愛の表示に過ぎないのである。然るに此等の行爲はやがて習慣となつて本來の意味が忘れられ、其れに呪力的効果があるやうに考へられて、終には専ら其れを目的として行ふやうになるのである (*The Development of Religion*, pp. 179-188)。*デルケイム*も儀禮に於ける種々の作法殊に手振りに呪術的效果が認められ、それが呪術的行爲となる過程について略々同様の説明を與へて居る (op. cit. pp. 359-360)。それで此等の意見によると呪術の多くは或る行爲と其結果とに最初から或る因果關係を認めて計畫的に實行する行爲ではなく、其起源は何等目的觀念のない自發的反應であつて従つて其根柢には少しも因果關係の合理的觀念は無いことになるのである。

然しながら又一方から考へるとリューバの云つたやうに、呪術の或物が最初から一定の目的を以て其手段と目的との間に必然的な因果關係を認めて試みられたことも否定し得ない。加之所謂自發的反應としての呪術的行爲もこれが單なる表出運動や目的のない習慣的行爲である間は、實は呪術ではないのであつて、それが或る呪術的效果を有すると信ぜられ、其れを目的として意志的に行はれる時に始めて眞の呪術的行爲となるのである。例へば人を狙つて棒を突き出すことも、それが單に憤怒や殺さんとする意志の表現である間は、單なる自發的反應であり、又婦人に對する鉢巻も唯其愛の表現であるならばそれは呪術ではない。唯それを人を害し得ると信じて行ひ、又婦人を己れに引附ける呪力ありと信じて、それが爲めに行ふ時にのみそれは呪術となるのである。即ち如上の自發的反應や表出運動は其自身呪術ではなく、其れが個人の慾望を充すべき方法として行はれる時に呪術となることはキング自身も認めて居るのである。故に其行爲の形式の起源は何であるにしても、既に一度それが呪術となつた時には、そこに其行爲の結果としての目的の觀念があり、其行爲と目的との間には何等かの因果關係が認められ、又必然に此等を結び付ける一般法則の漠然たる意識もあるのであつて、たとひ其因果觀念が甚だしく精密を缺

くにしても、呪術は決して盲目的な非論理的な行爲ではないのである。

要するに呪術は神秘的な超自然の方法ではあるが、決して不可能や不合理な結果を得んとするものではなく、其手段と目的との間には何等かの因果關係が認められて居る。又之を客觀的に批判すれば假令其因果關係の觀念が誤つて居り、其論理が不完全であるにしても、當事者の主觀的意識に於ては其れは極めて合理的な事であり、因果の法則に基く必然的な手段であつて、詐僞でもなく誤謬でもないのである。即ち呪術の當事者は其目的を達するに自然的な合理的な手段を用ひて居ると自ら信じて居るのであつて、口笛を吹けば風が起るといふのは、火に近ければ暖かくなるのと全く同様に自然的合理的と考へられて居るが、唯其れが他の方法と對照され其可能を信じない人々の觀念と對立して、初めて呪術的となると云ふのがジヂェンスの主張である (*Introduction to the Study of Comparative Religion*, pp. 73-74)。とにかく呪術が神秘的勢力を利用し、超自然的結果を得んとする手段であるにしても、其手段と得んとする結果との間には必然的な因果關係が認められて居るのであつて、當事者自ら之を合理的な手段と信じて居り、不可能や不合理と考へて居ないことは勿論、半信半疑で之を行ふのではないのである。

かく呪術の根柢には或種の因果觀念があり、又主觀的には合理的の方法と認められて居るとすれば、それは所謂科學的技術と何等の差異を有しないであらうか。それとも又何等かの點に於て科學と區別さるべきであらうか。此點に就てフレイザは呪術の基礎的觀念と近代科學のそれとは同一であると見做して居る。而して呪術的世界觀と科學的世界觀との類似は甚だ密接であつて、兩者の孰れに於ても象の繼起は眞に規則的に確實にして、不變の法則に依つて決定され、又此法則の活動は精確に豫測し計算し得べきものであると云つて居る (Golden Bough, vol. I, pp. 61-62)。然し呪術が其原理に於て科學と同一であると云ふことは、必ずしも其理論の形式、因果觀念の内容までが全然科學のそれと同一だと云ふのではないやうである。フレイザは自身も人が自然其他の現象を觀察して其間に連續を認め、種々の法則を立てる時、呪術は此法則の觀念に基いて行はれ、又其より生ずる眞正確實なる法則の觀念から科學は起るのであるが、然し此際呪術の基礎となる法則の觀念は甚だ粗雜であり、其因果觀念は多く誤つた聯想に基くことを認めて居る。ゼントは原始人は全く吾人の因果を理解せず、呪術的因果即ち價值的異常的事實のみを説明せんとする除外の因果は、科學的因果とは根本的に異ると云つて居るが (Völkerpsychologie, III, I, pp.

61-62) リーバは呪術と科學の一致を主張するフレーザの說に對して、呪術の因果觀念の内容が所謂機械的行爲即ち科學的技術に於けるそれと全く異ることを力説して居る。即ち科學の基礎觀念には因果の間に一定不變の分量的關係があるが呪術の因果觀念には全く此關係を缺いて居り、殊に所謂意志的呪術等の場合には、その呪師の人格から生ずる非決定的な測り難い要素が著しく加はると云ふのである。(op. cit. pp. 5, 187-190)。

それで此呪術に特有な論理や因果觀念の内容に就ては從來種々の説明が與へられて居る。先にタイラーは呪術の根柢は觀念の聯合に在りとし、人が觀念上に聯合する事物を、事實上に聯結するものと考へて、其間に因果の關係を認め、其一方を手段として之れと聯結せる結果を得んとするのが呪術であると云つた (Primitive Culture vol. I, pp. 104-105)。

爾來呪術の原理が聯想であると云ふことは一の定說のやうになり、フレーザに至つては最も之を力説し、類似聯想や接近聯想に基いて呪術特有の同一の法則や傳染の法則が生じ、「類似は類似を生ず」といふ呪術の基礎觀念が茲に成立すると見做して居る。又リーバは呪術の原理として反覆の原理、轉移の原理及び意志力の原理を擧げて居るが、反覆の原理とは一度原因結果として繼起した事實

は又常に相連續して起るといふ最も單純な因果觀念であり、轉移の原理は類似接觸等に依つて事物の間に神秘的勢力の轉移傳染があるといふ信念であつて、意志力の原理に至つては呪師自身の有する神秘的勢力の直接的轉移に外ならぬ(Cf. Haddock, *Magic and Fetishism*, p. 60; Hartland, *Ritual and Belief*, pp. 129-132)。又呪術の基礎的觀念が宗教と同じく神秘的勢力の觀念であることを主張するのは、デュルケイム一派の社會學者の共通點であつて、此點はキングやハートランドの意見も全然一致して居るが、若し呪術が常にかゝる神秘的勢力の觀念を媒介としてその原因結果を結合するものとすれば、呪術の因果は科學的因果とは異つた一種の神秘的な論理であつて、レギブルの所謂 *patologique* 即ち相入の法則に基いて普通の矛盾律を超越するが如きものとなるのである。それでユベル及びモリスによると呪術の基礎は聯想や類推の論理や、又因果の原理の誤つた適用ではなく、眞實の判斷、意識的推理であるが、それは價值判斷であり感情の論理であつて、實驗的合理的ではあるが又知性の論理とは異り、所謂矛盾を許すものである(*op. cit.* *pref.* XVII, XXVI-XXIX)。

尙かくの如き呪術の因果觀念の起源に就ては、原始的精神の不安定や單純なる輕信若くは *make-belief* や、意志の目的強要や集合的表象の特質などが其原因として指

摘されるが、とにかく其起原や形式が何であるにしても、全體として呪術に於ける因果觀念は普通の科學的因果觀念とは異り、其れよりも不完全な、少くとも單純な論理に依ることは明かである。故に呪術は當事者其人に取つては決して不合理のものではなく、何等かの意味に於て論理的であつて、そこには又或種の因果觀念があるのであるが、然し其因果觀念の内容、其論理の形式は、嚴密なる科學に於けるそれとは大に趣を異にするのである。

然らば此呪術の因果觀念は之を當事者の主觀的意識から見て、尙科學的因果と異なるものとして認められて居るであらうか。換言すれば呪術は客觀的には科學的技術と其基礎的論理を異にするものとして區別されるが、當事者自身に於ても亦其論理的基礎若くは合理性の異なるものとして、呪術と科學とを區別して見て居るか、將又呪術の當事者に於ては何等その論理的基礎についての反省批判なく、其れを以て唯一の合理的な方法として行ふこと科學的技術に於けると同様であつて、毫も其と科學との區別、對立を認めて居ないのであらうか。

此點に就て多くの學者の意見は呪術と科學との主觀的差別を認めず、心理的には呪術は科學と同様の合理性の意識を有すると見做すやうである。少くとも歴史的

に云へば呪術は原始人の唯一の科學であつて、特に他の純粹なる科學的技術があつて之と對立して居たのではない。即ち呪術に於ける神秘的な論理は彼等に取つて唯一の論理であり、文明人の有する如き科學的な因果觀念は之れから發展し分化するのであつて、最初から呪術的な因果觀念と對立して存在したものではないといふのである。デュルケイム派の人々は呪術と宗教は凡て神秘力の觀念を共通の基礎として有し、これに基く神秘的論理が原始社會に於ては唯一の論理であつて、科學的論理はこれが文化の進歩と共に社會的に發展されたのであるから、原始時代には存在しないとするのである。キングも之れと同じく自然に於ける擬機械的な非人格的勢力の觀念は、宗教や呪術と同様に他の凡ての文化の基礎である野蠻時代の哲學であり、自然界を説明する原始的觀念であつて、呪術は原始人の科學として原始社會に種々の技術と方法を與へると考へて居る(*op. cit.* pp. 163, 176, 202-203)。又ヴァントによると原始人は科學的因果を知らず、彼等の呪術的因果はむしろ科學的因果觀念の淵源である。蓋し彼等は日常眼に馴れた事象は自明のこととして、さらに之を知的に解釋し説明せんとはせず、唯だ特に利害關係の切實なる意外の事物に對して、其原因を説明する必要を感ずるのであるが、後に至りて此單純なる因果關係が漸次一般の事

象に推及されて、こゝに普遍的な科學的因果觀念が起るのである。(op. cit. III, II, 61-63, 262-267)。

此等の説によると原始人が驚異の眼を以て注意し、之を考察し説明せんとするのは彼等にとつて特に利害關係の痛切な而も意外の事變であつて、従つて彼等は之を説明するに多く神秘力の觀念を基礎とし、そこに一種の神秘的な因果關係を認めるのである。即ち此神秘的な論理こそ彼等にとつて唯一の論理であつて、彼等は之れと對比すべき自然的の因果觀念や科學的論理を有しない。故にかゝる神秘的な因果觀念を基礎とする呪術は、原始社會に於ては唯一の合理的な方法であつて、自然的方法に對する神秘的方法ではなく、彼等にとつてはむしろ其自身自然的な科學的な方法であるといふことに歸着する。

此説は確かに原始人の心理に深い同情を持つた考察である。ジエヂンスが云ふやうに彼等が口笛を吹けば風が起るといふことを、火に近づけば暖くなると同様に自然的の事と考へ、又彼等が頭の禿げるのを恐れて禿鷹の羽を身に着けないのは、吾人が傳染を恐れて熱病人の衣服を着ないと同様に自然的な方法であることは事實であるろう (op. cit. 73, 76)。⁵ 然しながらかく云へば凡ての呪術は其心理的性質に於て、凡ての

科學的方法と全然區別のないものとなつて終ふのであるが、今これを現代の文明人について見るに、彼等の呪術と科學的技術との間には、實に習慣的方法と理論的計畫としての方法とか、或は其基礎的論理の形式の完全、不完全とか云ふ客觀的差別のみならず、尙ほ當事者其人の意識の上に於て、その間に著しい差異が認められる。即ち固く呪術の効果を信じて、屢々呪術と科學的方法とを並用する人に於てすら、呪術は其因果の過程が神秘的超自然的であると同時に其結果の實現が多少決定的でないやうに思はれ、科學は一層合理的機械的な方法として其結果の豫想も呪術に於けるよりは精密であるやうに考へられて居る。即ち呪術は科學と同じく合理的論理的方法ではあるが、然も科學に比しては神秘的非決定的であつて、換言すればそれは超自然的な因果法に従ひ、神秘的に合理的であると云ふのが當事者の主觀に於ける意識である。それで若し主觀的心理學的の立場から呪術と科學とを區分するとすれば、此點に兩者の差異を認めなければならぬのであつて、心理學的に考へた呪術の科學に對する特徴は、それが超自然的に合理的であるといふ意識に存する。

故に若し原始人が吾人には呪術であるやうな方法を行ひながら、然も單純に之を合理的自然的と考へて居るとすれば、それは彼等に於て實は呪術でなくして純然た

る科學に外ならないのである。即ち暖くなる爲めに火を近けると同じ意味に於て、風を起す爲めに口笛を吹くならば、それは心理的には呪術ではなく、又禿頭を避ける自然的手段として禿應の羽を着けないと云ふが如きは、むしろ彼等に於て單なる科學であると云はなければならぬ。かくしてジエチンスの如き立場からすれば、原始人には終に眞の呪術は存在しないことになるのであるが、若し事實上原始人が眞に呪術を有するものとすれば、彼等は自然的と對立する超自然的の意識を持つて居なければならぬ。詳言すれば原始人の或る行爲の形式が、吾人の現在呪術として行つて居るものと同一であるが爲めに之を呪術と見做し、若くは其基礎的因果觀念の内容が科學的のそれと異なるが爲めに之を呪術と名けるのではなくして、其意識的性質より見て眞に呪術たるべき行爲形式を原始人の持つて居るとするならば、彼等は又吾人の呪術に於て特有な超自然的な因果の意識を有し、同時に又何等かの程度に於て自然的因果を意識して、兩者の對立を認めなければならぬのである。

ザントや社會學派の人々の考へでは、原始人は科學的の因果や論理を持たないといふのであつて、彼等が其内容に於て客觀的に嚴密に科學と云ふべき因果や論理を有しないことは事實であるが、然し又彼等自身の意識に於ても日常の事象に對して

自然的常規的と云ふべき感を有し、之れに對して特殊な異常的な事物に向つては超自然的神秘的の意識があつたことは想像するに難くない。原始人は日常平凡の事件に對しては、之を當然自明のこととして何等の因果的説明を加へずに閑却すると云はれるが、此特に説明を加へない所即ち當然のこととして看過する所に、彼等の自然的と云ふ意識が現はれて居るのであつて、其れは説明を加へないだけに吾人が此等を因果的に説明した後の自然的といふのとは、其理論的內容に於て大に異なるものがあるが、然し其當然であり自然的でありとする意識的態度に於ては全く同一である。而して之れと反對に彼等が特に説明せんとして努力する異常的事象こそ、彼等に取つては驚異の對象であり尋常でない超自然のことであるから、従つて先づ此等に對して與へられる因果の觀念は、自ら神秘的となり、後の科學的論理とは全然異つたものとなるのである。

かくして原始人に於ても其内容こそ意識的に決定されて居ないが、性質上自然的といふべき因果關係が漠然として意識され、之れに對して特異の超自然なる因果の觀念があるのであつて、従つて又心理的に科學的技術の萌芽と見るべき簡單なる日常の生活方法と、彼等自身にも多少神秘的と見える呪術とが並存して居るのである。

マレットは槍を敵に當て、之を殺すのは科學的方法であり、槍を振るのみで敵を斃さんとするのは呪術であつて原始人にも多少二様の態度が分化して居ることを説いて居るが、(Threshold of Religion, pp. 54-57) リーバも亦同様に原始人が或る目的の爲めに武器を造り、又風の力と方向を考へて弓矢を構へる時は、彼れが病魔を逐ひ拂ひ、敵の藟靈を焼き、或は狩獵の幸を獲ん爲めに性交を斷つ時よりも、其精神に於ても其方法に於ても一層科學的であると云つて居る (op. cit. 189-190)。即ちかくの如き場合には、彼等自身に於ても科學と呪術の區別を意識したのであつて前者の如き行爲の因果は之を自然的とし、後者の因果關係を超自然的神秘的と認めて居ることは明かである。

尙呪術の心理的本質的要素の一が超自然的因果の意識であることは、其基礎となつて居る神秘力の觀念に於て現はれて居る。固より吾人の見る所では呪術の最も簡單なものは、單純に、或る原因結果を直接的に連結するのみであつて、人格的勢力即ち靈鬼等の觀念は勿論非人格的な力の觀念すら存在しないのであるが (cf. Jevons, op. cit. pp. 89-90) 若し假りに多くの學者の主張する如く呪術の大部分がかゝる非人格的な力の觀念に基くことを許すならば、此神秘力の觀念は其自身に超自然的と云ふことを

意味して居る。キングは此種の神秘力の觀念は超自然的と云ふよりは自然的と超自然的との分化されなう一種の神秘的要素の觀念であると主張するが(op. cit. pp. 175-176)然し此の神秘力の觀念は一般的に凡ての事象の活動の根源としての力即ちエネルギ一の如きものではなく、特に異常なものにのみ存し、其れをして一般とは異なるものたらしむる原理である。現に此種の力の代表的觀念であるマナは超自然的な勢力又は功能であつて、凡て人間の尋常の力を超越し、自然の普通の過程の圏外に在る事物に働くものである(Codrington, *The Melanesians*, pp. 118-119)。而して此マナの無い日常の平凡な事物は原始人に取つては自然的であつて此平凡な自然的世界の外は原始人には皆超自然的であり呪術的であつたのである。

要するに呪術は當事者其人の意識に於ても、自然的因果に基くものとしての科學と區別され、超自然的神秘的な因果關係を有すると信ぜられて居る。而してそれは、客觀的に云へば多く誤つた因果觀念や不完全な論理に基く非合理的方法であるが主觀的に當事者の意識から見れば、合理的論理的であると同時に超自然的神秘的の方法と認められて居るのである。即ち此點に於ては宗教も亦呪術と同様であつて、宗教がある神秘的勢力若くは事物の觀念を中心として種々なる慾望に基いて或

る手段又は態度を取る場合には、其手段や目的の原因結果は主観的には合理的であると同時に又神秘的超自然的である。本來宗教的價値の原因結果は常に神秘不思議の觀念を離れないが、それは決して不合理的非論理的を意味するのではないのであつて、神學は即ち此合理性の證明と論理的根據の説明に外ならない。然も其證明や解釋が結局また不思議に終るのは、其れが單なる自然的因果や科學的論理を超越せる特種の超自然的因果や神秘的論理に基くことを意味するのである。(完)